OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

一般教育演習科目について

村　瀬　裕　也

1　一般教育の問題状況と演習科目

一般教育の理念が民主主義教育の根本原則と不可分の，本質的関連にあることは，今更贅言を俟つまでもないであろう。それは「教育勅語」に示される非合理な国体観，複線型教育体系のもとでの人間の差別的形成，高等教育における閉鎖的な専門主義，等々の特徴によって規定される戦前及び戦時中の教育に対する根元的な反措定の一環であった。こうした過去の教育体系のもとでの人間と学問の疎外に対して，民主主義社会の構成員としての普遍的人間性の形成，専門の枠を越えひろく人間の社会的実践一般に係わる科学的合理性とヒューマニズムの確立こそ，一般教育本来の教育的並びに学問的な使命でなければならない。

しかしながら大学における一般教育は，最近に至るまで理念と現実との間に天淵の開きがあったと云っても過言ではない。一般教育は「面白くない」「高校の繰返しだ」「学生の主体性を無視したマスプロ教育だ」「単位集めに過ぎない」等々，多くの非難の声がそれに対して浴せられてきた。勿論こうした声によって従来の一般教育のあり方を一面的に把えることは出来ないし，またそれによって一般教育のために心血を注いだ個々の教官の貴重な努力が貶価され，無に帰されるようなことがあってはならない。とは云え，もともと火のない所に煙はたたない。上記のような非難の発せられる理由が，多くの大学における一般教育の頽落的実態にあったことは否定できないであろう。かかる事態が長年に亘って放置されてきた原因は，第一には文教政策積年の無為無策による劣悪な条件に帰せられようが，同時に一般教育の理念と使命に対する真の省察を伴わないまま，多くは安易な教養主義的観念のもとにそれに携ってきた担当者の側もまた責任を免れないであろう。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

それとともに，学生の主体性というようなことが大学教育，とりわけ一般教育のあり方に関連して痛切に反省されるようになった今ひとつの事情に注目しなければならない。すなわち多くの学生を風靡し，年を追って顕著さを加えていくように見える，学問に対する問題意識の欠落と没主体的な態度である。もとよりすべての学生がこうした風潮に毒されているとは云えないし，徐々に優れた芽の育ちつつあることも見落してはならないが，一般的傾向としてこのような現象が蔓延していることは無視できないであろう。本誌前号において宇川勝美教授はこの状況を大学の「大衆化」現象として把握され，これを学生の量，質，生活意識の三点から説明された。すなわち学生数の量的増大と大学の巨大化は戦後の大学の端的な特徴である。しかしそれは単に量の問題に留らず，同時に質の変化を齎している。かっての大学生は文字通り知的エリートであったが，現在の大学生は高校時代の成績で中以下の者を相当数含み，また学生の出身階層も低所得者層，勤労者層，農民など広範に及んでいる。更にこうした実情は学生の生活意識にも反映し，勉学への情熱よりも寧ろ享楽的願望への傾斜を強く示している，と。宇川教授の指摘された点は確かに大学教育を困難ならしめている実態の一面ではあろうが，把握の視点には幾らか問題が含まれているように思う。学生数の量的増大と出身階層の拡大多様化は，進学を望む主観的動機はともかくとして，客観的には教育に対する国民の権利意識の増大を意味するものであり，科学・文化の国民的普及発展という見地からも肯定的に評価しなければならぬ事柄である。かかる量的増大は多くの学生の享楽的傾向や学問に対する没主体性という風潮の直接の説明根拠にはなり得ず，両者をひとしく「大学の大衆化」の現象として一括する見解には与することが出来ない。後者は寧ろ社会的・政治的趨勢と，それに制約された後期中学教育に至るまでの教育のあり方の問題として理解されなければならぬであろう。過度の受験競走と考える余裕もない成績主義的な受験教育が，「三無主義」と云われるような自閉的精神状況の一因となっていることは既に以前から指摘されてきたが，最近では人間の選別が受験競走の結果として行われるだけでなく，却って教育の内実そのものが差別選別の過程と化し，生々とした「真理感情」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（ペスタロッチ）の育成と，共通の課題に取組む友情に支えられた探究意欲の形成を阻害している。こうした中で，とりわけ高等学校においては，進学試験さえもがかってのように勉学意欲を駆りたてる動機づけの意味を喪失し，そのことが教育上深刻な問題となっていると云われる。

大学に進学した学生達は，後期中等教育に至るまでの以上のような状況に蝕まれつつ，他面では新たなものへの漠然たる期待感を抱いた複雑な状態にある。その彼等を主体的な学問探究へと導くべき一般教育がいわゆる「マスプロ教育」に過ぎなかったとすれば，期待を裏切られた空白感は彼等を一層無気力と沈滞に追いやるほかはないであろう。全国的な大学問題と関連して従来の一般教育のあり方が問われたとき，多くの大学において，「対話」「交流」を復活した演習形式の授業科目の開設が――それぞれの抱えた困難な条件にも拘らず――真剣に検討され始めたことは極めて当然であったと云える。しかし我々が留意しなければならないのは，一般教育における演習科目は，単に状況対策的なものではなく，一般教育の理念と本質に基く固有の意義をもつものでなければならぬということである。

2　講義科目及び専門演習科目との対比における一般教育演習科目の意義

一般教育演習科目の意義と特質は，「演習科目」という形態と「一般教育」という限定との両側面によって規定される。前者は旧来の講義形式の授業との対比において，後者は専門の演習科目またはゼミナールと比較される内実上の問題として考察することが出来るであろう。

前者の側面から見れば，演習科目はいわゆる「マスプロ教育」なる状況を打開するものとしての直接的意義をもつ。この「マスプロ教育」という非難は，全国的な大学問題に関連して最も頻々と語られた言葉のひとつであり，演習形式の授業が殆ど行われていなかった一般教育の場合，それはとりわけ痛切な響きを以って受留められたように思われる。但しこの種の非難は，必ずしも事態に対する充分な分析把握に立脚していたとは云えず，「大学紛争」に伴って発

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

せられた幾つかの感覚的・衝動的な絶叫のひとつに過ぎない場合も少くなかった。というのは一言で「マスプロ教育」と云っても，それは単に受講学生数の多寡の問題にのみ解消され得ないからである。一般教育の理念と本質に基礎づけられぬまま慢然と惰性的に行われてきた授業の内実にこそ，一層根本的な問題があったと思われる。このことは逆に，多人数の受講生を対象とする講義形式の授業が，それだけの理由で直ちに「マスプロ教育」であるという結論には短絡し得ないことを意味する。講義が教官の創造的研究を基盤に，学生の問題意識を喚起し，方法上の理解を深める仕方で展開される以上，一般教育において講義形式の授業が開設され，一定の範囲でその聴講が課せられることは決して無意味ではない。とはいえ、それは飽くまでも一定範囲においてのことである。講義形式の授業はいかに内容上の工夫が凝らされ，またいかに質疑応答の時間が設けられるにしても，外面注入的・一方通行的であるというこの授業形式本来の制約を越えることは出来ない。従って一般教育が語学や体育実技などを除き，かかる形式の授業でのみ編成されていたということは，学生を単なる受動的な被教育者としてではなく，同時に能動的な探究主体と見なし，あるいは寧ろ共同の探究の場においてかかるものとして育成しなければならぬ大学教育本来の姿とは云えないであろう。一般教育における演習科目の端的・直接的意義は，このような現状を打破し，教官と学生が直接交流対話し得る小人数授業の場を全体の授業計画の中に確保する点にあったと云ってよい。

しかし一般教育演習科目の意義は，単に講義形式の多人数授業と対比される形式上の問題にのみ尽きるのではない。もしそれが単に「対話」「交流」を復活した小人数授業というだけで，各専門分野への入門的，乃至は基礎科目的内容に留っているとすれば，一般教育演習科目のまさに一般教育たる所以の意義は甚だ薄弱なものとならざるを得ないであろう。我々はそれを単に専門演習科目乃至専門ゼミナールの低段階のものとしてではなく，「一般教育」という限定によって齎される固有の内実を備えたものとして把握しなければならぬ。それは一言で云えば，既成の知識体系の習得，特定の専門技術の錬磨よりも，寧ろそれらの根底に活き，あるいは更に人間の社会的実践一般に係わる本来の学

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

問性そのものの体得を重視する立場である。専門の演習やゼミナールにおいては，学生の主体的参加は当然の事柄として了解されている。殊にゼミナールは学生の自主的研究を中心として行われる場合が少くない。しかしここでは研究課題たる対象は細分化された既成の知識体系によって限定されており，かかる枠組のもとでの主体一対象関係の直接的性格の故に，学問の普遍的本質や学問における主体的契機（対象と主体との間接的関係，及び対象に立向う主体相互間の共同的関係なる両緊張関係において営まれる学問的認識判断活動）についての省察を媒介とせぬまま，ややもすれば専門主義・技術主義の泥坑に陥る危険を免れない。学問における学問性，学問の普遍的本質は諸々の専門領域において貫徹され，発揮されなければならぬが，しかし前者は後者の前提として固有の問題領域をなしており，ある場面において自覚的に考究体認される必要があるであろう。一般教育演習科目は各領域の内容に即してテーマが設定されているが，しかしそれは単に各々の領域の入門ではなく，そこに貫かれている学問の本質，方法，問題などの自覚的追究の場として，叙上の課題に応えるものでなければならぬと考える。

かく叙べれば，恐らく次のような疑問が出されるであろう，すなわちそれは教育論的観点から見れば，旧き形式陶冶説の復興に過ぎないのではないか，と。学問の普遍的本質や知的認識判断の方法が相対的自律性において考究体認されるということは，確かに教育思想史上におけるいわゆる形式主義，あるいはそれの哲学的根拠とも云うべき悟性的思惟と対象的所与との二元論的把握と類似の性格を思わせるかも知れない。かかる見解は，科学の教育的価値はそれ自身の内容の及ぶ限りにおいてであると宣言した新しき実質主義によって，あるいは「方法は内容そのものの内在的な魂である」として形式主義的方法観に対立し，思惟の内在的活動（必然的発展）における内容的契機を重視したヘーゲルによって，既に克服されたものに過ぎないように見える。しかし彼等が内容を強調したのは決して専門主義的・技術主義的な意味においてではなく，却って諸領域・諸内容をその内的秩序と連関において全体的な視野の中に入れることであった。そしてそこでは対象全体の内的連関や，内在的活動としての方

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

法は，形式主義とは異る意味においてやはり独自の考察の対象であったし，また内容に即して意識的に反省されなければならぬものでもあったのである。しかも一般教育はヘーゲル流の観照的・回顧的・追体験的学問観には留り得ない。それは却って不断の課題解決過程たる人間実践の根本に係わる学問性を志向する。そこでは学問の統一性と学問における主体的契機が絶えず問われなければならぬであろう。故にそれは，外面的形式主義とは異る立場から，自己の本質に従って固有の批判主義的視点の確立を要請するのである。

以上の前提にたって，「一般教育」という限定から来る演習科目の特質と，今後の検討課題としての授業形態の問題を次の二点に要約しておきたい。

(1) 主体と対象の問題。一般教育演習科目においては，専門主義・技術主義における主体と対象との係りの直接性が克服されなければならぬ。主体における主体性の確立，主体的機能の自律化は，対象の対象化・客観化と常に相関的なものだからである。より具体的に云えば，各々の科目はそれぞれの領域の内容に即しているが，それらは人間がそこにおいて活動し，不断の課題解決の道程を歩む客観世界（自然と社会）乃至はそれの人知における獲得としての学問体系全体の脈絡において対象化され，かかる対象化を媒介として，非合理的・情念論的主体性論とは異る知的実践としての主体の主体性が――ここでもそれ自体の対象化において――問われるのでなければならぬ。このことは同時にここでの認識の性格を規定する。すなわち個々の領域における知識体系の修得を以って終るのではなく，認識が同時に課題を生むという意味においての「課題化的認識」こそ，ここでの教育・学習活動が自覚的に追究すべきものであろう。

(2) 主体相互間の問題。既に「要項試案」において，集団思考・共同討議による共同の真理の探究ということが，一般教育のあるべき姿として強調された。一般教育演習科目はその性格上この課題に端的に応えるものでなければならない。しかし一言で「共同の真理探究」と云っても，そこには二，三の要素が考えられなければならぬ。ひとつは教官と学生との関係であり，この点は両者の間に「対話」「交流」を復活させなければならぬというような形で，全国的な大学

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

改革の波の中で最も意識的に追究された事柄であった。しかし共同化は教官と学生との間だけではなく，一層本質的には寧ろ学生相互間において確立されなければならぬものである。同時に教官と学生，学生相互の間の共同は純粋に人格的な間柄関係において成立つのではなく，却ってある現実的課題に直面し，それを解決する具体的な働きの場における相互の連繋にほかならない。かくてそこには，共通の問題と真理志向の共有における教官と学生及び学生相互の立体的関係が成立たなければならぬ。教官と学生との関係は云うまでもなく指導一被指導の関係であり，教官の計画性・指導性が発揮されなければならぬが，しかしこの関係は一方向的なものであってはならぬ。それは共通の課題に取組む学生相互の関係が前提とされており，従ってこの側面からの教官の指導性に対する反作用も当然この関係に含まれていなければならぬ。理想的に云えば，課題の設定，更にはカキュラム編成にも学生が積極的に参加することが望ましい。しかし漸く学問の端緒についたばかりの初年次の学生のみを対象とする現在の演習科目において，これは飽くまでも理想論に留まるであろう。従ってゆくゆくは，後期一般教育の立場をも考慮に入れ，上級生をも加えた新たな形態での演習科目のあり方が検討されなければならないと考える。

以上，今回は原則的な問題の論議にのみ終始し，具体的・方法論的な問題への論及は割合せざるを得なかった。ひとつは時間余裕がなかったためでもあるが，同時に私自身の実践的裏付けが未だ極めて不充分であったからでもある。従ってこの重要な問題についての詳細な考察は次の機会に譲ることにしたい。